

【巻頭言】



電気釜と日本語ワープロ

佐藤 誠

東京工業大学



「ワープロ1号機や電気釜も文化遺産——文化審議会文化財分科会企画調査会は16日、従来の文化財保護法ではとらえきれない文化遺産について、新たな法令などを設けて保護することなどを盛り込んだ報告書をまとめた。ワープロの1号機や最初の電気釜など「近代の科学・産業遺産」についても文化遺産として保護するよう求めている。(毎日新聞 2001.11.17)」

ワープロとはもちろん日本語ワープロ、すなわち日本語ワードプロセッサのことである。日本語ワープロは東芝により初めて開発、製品化された。最初の製品発表は1978年のビジネスショーである。ふと目に入ったこの新聞記事から、もう20年以上前のあの日が懐かしく思い出されてきた。

当時、私は博士課程を修了して助手になったばかりであった。学生のときから文字認識の研究をしていたこともあり、日本語入力には興味があった。英文電動タイプライタが、半自動印字修正機能(いったん戻って修正用の白テープに切り替え同じ文字をもう一度タイプすると、見事にミスタイプが削除できるという仕掛け)やメモリ機能を備えることにより、次第に英文ワープロへと進化をはじめていたところである。その便利さに大変刺激を受けていた。日本語文書もこのような方法で作れないものだろうか。私は密かに“和文ワープロの開発プロジェクト”を練りはじめていた。

研究室には一台の和文タイプライタがあった。和文タイプライタは、漢字の印字フォントが平面上に並べられ

ていて、印字したい漢字をその中から見つけ出し、レバーで用紙台をその位置に移動させて、打点するという仕組みの機械である。一文字一文字を眼で拾いながら印字するため、一つの文書を作り上げるのに大変時間がかかる。この和文タイプライタのレバー操作を何とかモータ制御により自動化して、研究室のミニコン(すでに死語となっている。メモリ容量が16kバイト、コアメモリであった)につなげることができれば、日本語ワープロになるはずである。

部屋の片隅にある和文タイプライタを横目でにらみながら、何度も設計をやり直していた。そんなところである、今度のビジネスショーでなにやら日本語ワープロという新しい日本語入力装置が発表されるそうだ、という噂が耳に入ってきた。研究室の学生達とさっそく見学に行くことにした。案の定、日本語ワープロの周りは黒山の人だかり。熱気に包まれていた。オペレータがキーボードから文章をカナ入力すると、瞬時にプリンタから日本語文書が打ち出されてくる。その機能の斬新さに目を見張るとともに数百万円という価格にため息をついたものである。

この製品の登場により、極秘プロジェクトもすぐに打ち切られたとお思いでしょう。しかし実はその後もしばらくは続いた。初期のプリンタは16×16ドットで一つの漢字を表しており、その印字品質が大変粗く、印刷文書の見栄えが悪かった。それに比べて、和文タイプの方ははるかにきれいであり、和文タイプを自動化する意義はまだまだ十分にあるように思えたのである。ところが、その後

の日本語ワープロの発展はご存知のとおりで、プリンタの印字品質は年毎に良くなり、価格は日毎に下がっていった。プロジェクトもいつのまにか忘れ去られていった。

あれから、20年余り、日本語ワープロの機能はパソコンに組み込まれ、製品としての役割を終えようとしている。東芝もすでに日本語ワープロの製造を打ち切っている。一つの製品が生まれて、普及し、そしてその役割を終える。その一生が私の研究生活とこんな風に重なったこともあり、思い出の深い製品となっている。

それにしても、日本語ワープロが文化遺産になろうとは、極秘プロジェクトを練っていたあのころは夢にも思わなかった。考えてみると電気釜も日本語ワープロも日本の文化や日本人の生活に深く根ざした製品である。VRにも日本人にしか創れない日本型VRがあってもいいと思うし、それが大いに可能な研究分野だと思う。若い会員の皆さんの中からそんなことに挑戦する人がでてきて、将来、文化遺産となるようなすてきなVR製品が生まれることを期待したい。

【略歴】

佐藤 誠 (SATOHI Makoto)

1951年名古屋生まれ。1978年東京工業大学大学院電気工学専攻博士課程修了、工学博士。現在同研究所教授。東京工業大学総合理工学研究科知能システム科学専攻教授を併任。専門は知覚情報処理メカニズムの解

明とそのバーチャルリアリティやヒューマンインタフェースへの応用。1985年の筑波科学博富士通パビリオンの全天周立体CG映像“ザ・ユニバース”を観て大いに感激し、VRに目覚める。VR世界を直接触れるための蜘蛛の巣状ハプティックインタフェースの研究に従事。